コーヒー指数市場はこうなる

関西商品取引所のコーヒー指数先物 2001年8月からスタート

出来高、取組は順調

日本経済新聞社記者　北島　穣

関西商品取引所（関西商取）は8月1日、「コーヒー指数」の先物取引をスタートしました。ニューヨーク市場を中心とした国際コーヒー市況が低迷する逆風のなかでの船出になりましたが、同取引所は1998年8月から開始した「国際穀物等指数」（現コーン75）に続く指数先物取引の第2弾として今後の成長に期待しています。

ベースは2種のコーヒー

コーヒー指数は、東京穀物商品取引所（東穀取）が98年6月から上場しているアラビカ（中南米諸国産）とロブスタ（アジア諸国産）という2種類のコーヒー生豆の現物先物取引の価格をベース（原市場）にして指数化したものです。取引所側はその特徴として①現物の受け渡しがなく最終決済日（納会日）には前営業日の指数値を使い、現金の授受によって取引を終了する現金決済方式とした②2種類の価格をベースにしているため、コーヒー豆全体の価格指標になる③倍率が1,000倍で、国内の他市場と比較して委託証拠金を低額に設定しているため投資効率が良い取引ができる――などを挙げています。

取引開始後1カ月間（8月）の状況をみますと、出来高は約12万枚（1枚は最低取引単位）で、取引所側の見込みをかなり上回りました。また、市場の規模や人気を表す8月末段階の建玉（取組高）は3万枚強。同取引所の寺田喜長・特別推進チーム部長は「国際穀物等指数の立ち上がりより順調で、当初目標より早く建玉の3万枚乗せを実現した」と話しています。9月以降は東京工業品取引所（東工取）で原油の先物取引がスタートしたこともあって、取引はやや落ちましたが、岩村信理事長は「総体的にみて予想通り。まあまあの船出」と判断しています。

特別推進チームつくる

関西商取のコーヒー指数先物に賭ける期待は大きいものがあります。というのも第1弾の指数先物だった国際穀物指数を上場した経緯が窮余の策だったからです。当時、東穀取と関門商品取引所（現福岡商品取引所）に続いてトウモロコシを上場しようとしましたが、農林水産省が難色を示しました。このため、関西商取はトウモロコシの代替商品として国際穀物等指数を上場せざるを得なかったので

す。2000年央に衣替えしたコーン75指数もそこそこの人気はありますが、同取引所の今回のコーヒー指数に寄せる気持ちには、穀物指数とは違うものがあるようです。

関西商取は2001年４月から市場活性化をねらって、役員直結の「特別推進チーム」を設け、建玉の拡大に向けてキャンペーンを実施するなど積極的に動き出しました。その内容は、生糸、大豆など既存の上場商品の建玉を12万枚、コーヒー指数の建玉を３万枚、合計15万枚の建玉規模とすることを目標としています。１日当たりの出来高も採算ラインといわれる１万3,500枚以上を目指すことになりました。

岩村理事長は「コーヒー指数の建玉３万枚以上の維持はそれほど難しくはない」とみています。関西商取は来春にも水産物では初めての冷凍エビの新規上場も予定していますが、目先的にはコーヒー指数が柱になるわけです。

関西商品取引所のコーヒー指数取引要綱

構成銘柄	アラビカコーヒー生豆（中南米諸国産） ロブスタコーヒー生豆（アジア諸国産）
対象限月	期近限月
原市場	東京穀物商品取引所
基準値	原市場の2000年度（2000年４月～2001年３月）１年間の平均を1,000とする
取引単位	１枚（約定指数×1,000円）
呼値単位	１ポイント（１枚当たり1,000円）
取引限月	隔月の６限月（奇数月）
決済	反対売買による現金決済
取引仕様	単一約定指数による競争売買（コンピューターによるシステム売買）
委託手数料	完全自由化

コーヒー指数を上場した関西商品取引所

価格低迷がマイナス

コーヒー生豆は穀物などと並ぶ大型の国際商品です。ニューヨーク・ボード・オブ・トレード（NYBOT）が世界のコーヒー価格を決める最大の先物市場で、ロンドン国際金融・先物オプション取引所（LIFFE）も重要です。

この米欧の市況を映す形で東穀取のコーヒー現物先物相場が動き、そして関西商取のコーヒー指数先物相場が揺れ動くという格好になります。コーヒー指数先物は現金決済のため、個人投資家も機動力のある資金運用ができるはずです。

ただ、世界的なデフレ経済、ブラジルなど生産国の増産などを背景にして米欧のコーヒー価格が記録的な安値水準にあります。右肩上がりの市場になる可能性は当面、見込めそうもなく、指数先物市場の拡大にとってはマイナス要因として働きそうです。